

1987年の本。佐高 信の処女作。

こうした無意識の腰巾着性と序列性は当人だけにとどまらない。

たとえば毎日新聞に連載された日本企業の「海外駐在員」のコーナーには、ある年の夏、日本の政府系銀行のロンドン支店長の夫人以下、この銀行の奥さま族がロンドンから二時間のドーバー海峡ぞいの海岸へ海水浴としゃれこんだという記事が出ていた。

海岸に着き、着替えてさて海へ、という段になるや、この奥さま族たち、波打ち際で「支店長の奥さまからお先へどうぞ」「いえ次長さまの奥さまの方が上手でいらっしやるから……」と譲り合いを始めたのだという。数回譲り合って、やっと支店長夫人が静かに海に入り、続いて次長夫人、課長夫人らが亭主の肩書順に入っていった。

・・・

北九州市にある新日鐵の社宅は、平社員、係長、課長、部長と厳しく区別され、それぞれ建っている場所も違うし、偉くなるほど広く立派になる。最高の社宅街は八幡区の高見地区で、閑静な一角に所長社宅や部課長社宅が並び、少し離れて係長社宅がある。

ある係長は苦い笑いを浮かべながら、次のような話をしてくれた。

「娘があるとき、『どうして課長と係長の子どもが遊んじゃいけないの』と聞くので、わけを聞いてみたら、『課長の子どもと遊んでいたら、お母さんが出てきて、遊ぶなら部長さんの子どもと遊びなさい、といったの』というんですよ」

こうしたモーレツ経営の“指針”となっているのが、電通の故吉田秀雄社長がつくった「鬼十則」（一九五一年八月制定）と「責任三ヶ条」（一九五三年三月制定）である。

「鬼十則」

- 1 仕事は自ら創るべきで、与えられるべきでない
- 2 仕事とは先手先手と働き掛けて行くことで受身でやるものではない
- 3 大きな仕事と取り組め、小さな仕事はおのれを小さくする
- 4 難しい仕事を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある
- 5 取り組んだら放すな、殺されても放すな、目的完遂までは……
- 6 周囲を引きずり回せ、引きずるのと引きずられるのとでは、永い間に天地のひらきがで  
きる
- 7 計画を持て、長期の計画を持っていれば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生  
れる
- 8 自信を持て、自信がないから君の仕事には迫力も粘りも、そして厚みすらない
- 9 頭は常に全回転、八方に気を配って、一分の隙もあってはならぬ、サービスとはそのよ  
うなものだ
- 10 摩擦を怖れるな、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ、でないと君は卑屈未練になる

「責任三ヶ条」

- 1 命令・復命・連絡・報告は、その結果を確認しその効果を把握するまでは、これをなしたものの責任である。その限度内における責任は断じて回避できない。
- 2 一を聞いて十を知り、これを行う叡知と才能がないならば、一を聞いて一を完全に行う注意力と責任感を持たねばならぬ。一を聞いて十を誤るとき者は、百害あって一利ない。正に組織活動のガンである。削減せられるべきである
- 3 われわれにとっては、形式的な責任論はもはや一片の価値もない。われわれの仕事は突けば血を噴くのだ。われわれはその日その日に生命をかけている。

総合商社の歴史は、ある意味では合併の歴史だが、こうした歴史の中で「被合併会社の社員のクビを切る方法」が確立されているという。

それは、短期間に三回転勤させることで、まず慣れない商品を扱う地方へ転勤させる。一年に三回ほど転勤させれば、どんなに忍耐強い人もまず退職するという。

- 一、捨てさせろ
- 一、ムダづかいさせろ
- 一、季節を忘れさせろ
- 一、贈りものをさせろ
- 一、流行遅れにさせろ
- 一、混乱をつくりだせ

.....

さすがに現在は廃止されているというが、これは、資本主義の戦略産業ともいうべき日本の広告業界を牛耳る電通の元社長、永田久光がつくった「戦陣訓」である。「ゆたかな社会」という目的よりも、利潤につながる競争の重視がこれほど赤裸々に表現されている例はそう多くはあるまい。

安全性を要求される商品が利潤追求の過大な競争によって、安全を無視してつくられる場合がある。その代表的な例が「ホンダ N 三六〇」という欠陥車である。まったくの新車をつくる場合、設計から量産開始までのリードタイムを、日本の業界では二、三年とる。アメリカでは、たいてい五年とるが、本田技研工業は最初これを九カ月でやろうとした。

結局、設計開始から一年二カ月かかったが、試作揆階で「この車は満足に走るのか」という疑問さえ出たという。

案の定、「横ゆれ、蛇行」で事故が続出し、被害者同盟が結成された。事故件数百七十四。内訳は死者三十四、重傷者七十五、軽傷者八十三。

.....

本田の元宣伝課長、吉野定二は次のよ

うに真っ向から会社の体質を批判している。

「本田ほど冷酷に社員とディーラーを切り捨ててきた会社は業界にはありません。昔は営業部員はオートバイに寝袋を積んで、全国各地に集金に行かされた。二十九年には「耐えられない」という遺書を残して、営業部員の一人が河口湖で自殺しました。ディーラーにとっていちばんつらいのは押し込み販売とテリトリーの削減でしょう。たとえば月間二百台の販売能力しかない店に、三百台ぐらい押し付ける。売れ残った車は本社への負債となり、日歩四銭の利息をとるから借金は雪ダルマ式。狭い地域にディーラーを乱立させ、過酷な競争をさせる」

マジメさというのは、容易に自分の視野の狭さを勤勉な自分自身への自己陶醉によってマヒさせる「まじめナルシズム」を生む。

私たちは「まじめナルシズム」と責任転嫁の被害者意識にからめとられて、「清く正しくマジメに生きよ」「だまされるとも、だますな」と教えられてきたし、教えてもきたが、そこに欠けているのは「だまされる自分が悪い」という視点である。

この点をするどく指摘したのは映画監督の伊丹万作であった。敗戦の翌年に書いたエッセイ「戦争責任者の問題」で氏は次のように言っている。

・・・

「『騙されていた』と言う一語の持つ便利な効果に溺れて、一切の責任から解放された気で居る多くの人々の安易きわまる態度を見る時、私は日本国民の将来に対して暗たんたる不安を感じざるを得ない。『騙されていた』と言って平気でいられる国民なら、恐らく今後何度でも騙されるだろう。いや、現在でもすでに別の嘘によって騙され始めているに違いないのである」

国会議員が海外に出かけて、現地の駐在員が空港に出迎えると「絵葉書はないかね」と言うという。そして分厚い名簿を渡されて「よろしく」と言われ、数人の若手駐在員が数日間、選挙区向けの宛名書きと切手貼りに追われたりすることになる。

私も、宮崎が憤慨するような光景を実際に見たことがある。それは日本銀行の金融記者クラブの一室でだった。生命保険協会会長に就任した住友生命の新井正明が、戦争の後遺症の隻肢で、義足を引いてあらわれ、深々とおじぎしたとき、七、八人はいた記者たちの誰れも、それに返礼しなかったのである。記者クラブ制度そのものが取材対象との癒着を生むという大きな問題を抱えている、と私は思うが、それにしても、その光景はショックだった。言論という強力な権力を握り、その特権をあたかも当然のように振舞っている記者諸君に、正当な権力批判ができるのだろうか、とまで思ったものである。

「銭は一銭もいらん。そのかわり会社のえらか衆の、上から順々に水銀母液ば飲んでもらおう。そして死んでもらおう。その奥さん方も飲んでもらおう」という水俣病患者の叫びは、企業人とその家族を刺し貫くものである。

こうした叫びを原点に、企業の道義的責任と同時に法律的责任が追及されなければならない。

近年、「企業の法律的责任」については、無過失責任論が高唱されているが、その論拠としては「利益あるところに損失も帰属させるのが衡平である」とする**報償責任論**と、「危険物の所有を社会的に許された者は、危険物から生ずる損害については無条件に責任を負担せよ」という**危険責任論**があり、また、ある程度の因果関係が明らかになれば、被告の企業側が逆に証拠を挙げてそれに反論しなければならないという**挙証責任の転換論**も主流となってきている。